

「東京新聞」の「平和の俳句」、6月掲載の俳句より。今月は、女優でエッセイストのミムラ氏が選者に加わっている。「シリアから赤子の泣き声風にのる 東清隆 (61歳)」<金子兜太 シリアが化学兵器を使ったとして、米大統領はミサイル攻撃で報復。しかし解決にはならず、聞こえてくるのは赤子の泣き声のみ。無謀。> 栄区九条の会が、高遠菜穂子氏を招いて講演会を持った。彼女はイラクで拉致され、かろうじて解放されたが、現在もイラクの危険な地域で人道支援活動を続けている。死傷者の写真を見せられ、その残酷さは目を覆いたくなるほどであった。米国の女性ジャーナリストが書いた『シリアからの叫び』を読み、シリアは更に深刻であろうと思った。シリアでは爆弾の着弾音が生活のBGMだという。その下で、多くの子どもたちが泣いている。

「戦争は大馬鹿 (ばか) 者の大ゲンカ 酒井芳生 (70歳)」<ミムラ 双方に“大”がついたことでコミカルになり真意がすっと胸に入る。> <いとうせいこう これは痛快。利口者は外交と経済関係と市民交流で国家を利する。> ミサイルの発射実験を止めない北朝鮮と空母を中心にした米艦隊との間で一触即発の危機があった。しかし、北朝鮮は戦争を仕掛ければ、国が崩壊することを知っている。米軍も攻撃を開始すれば、韓国、日本の米軍基地が多大な損害を被ることを知っている。戦争は回避された。当然であろうが、大馬鹿者が少しは賢くなったのであろうか。

「平和の俳句 戦後72年」、「琉球新報から 平和のうた」より。「かたつむり基地に向かって進み行く 安里蕪冥 (67歳)」私は沖縄の基地は嘉手納基地と普天間基地しか見えていない。嘉手納基地では戦闘機のタッチ アンド ゴーの訓練をしていた。すごい爆音であった。普天間基地は町の真ん中に滑走路が走っている。誰が見ても、危険この上ない。あるパレスチナ人が沖縄県民はなぜ基地への武力攻撃をしないのかと書いているのを読んだことがある。基地反対闘争をした阿波根昌鴻氏は、手は肩より上に上げない非暴力に徹した。かたつむりのようにゆっくりと基地に向かい、これを取り除いていく。

「記者の『一句』」より。「アンダーコントロールされているのは私達 八角宗林 (64歳)」 「俳句」というより「川柳」のようだが、気持ちはよく分かる。東京五輪・パラリンピックの誘致の時、安倍晋三首相が「福島原発はアンダーコントロールされている」と語るのを聞き、あつけにとられた。「秘密保護法」「安保関連法」、そして「テロ等準備罪法」が強行採決された今、アンダーコントロールにあるのは国民だと恐怖をもって実感する。とにかく、言葉を失わないようにしたいと思っている。

「罪過ありて反省の上に立つ平和 折田和代 (64歳)」日本の憲法は敗戦経験の痛手が生み出した。そこには、深い罪過の認識があった。従軍慰安婦はいなかった、南京虐殺はなかったなどと歴史を歪曲し、罪過を消し去ろうとする主張からは平和は生まれてこない。中国帰還者連絡会の方々は中国での戦争で残虐行為に走ったことを、苦しみ悶えながら罪責告白をした。彼らの誠実な罪責告白に平和を作り上げていく真の力を見る。

「積み木積む崩れまた積む平和とは 荒井良明 (68歳)」荒井氏は元英語教師だそうだ。教育と平和には共通点がある。積むが崩れる、そこでまた積む。根気よく何度も繰り返す。平和は与えられるものではなく、不断の闘いの中で、勝ち取っていくものである。政治の流れに一喜一憂せず、変わらぬ平和への思いを持ち続け、声を上げることである。諦めないことが、勝利をもたらすという沖縄県民の声を心に受け止めていきたい。